

## 嗜癖概念の理解と介入に関する臨床心理学的研究： 「習慣への没入」概念を用いた検討

石田, 哲也

<https://hdl.handle.net/2324/1500481>

---

出版情報：九州大学, 2014, 博士（心理学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名	石田 哲也				
論文名	嗜癖概念の理解と介入に関する臨床心理学的研究 —「習慣への没入」概念を用いた検討				
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	佐々木	玲仁
	副査	九州大学	教授	福留	留美
	副査	九州大学	教授	南	博文
	副査	九州大学	教授	吉良	安之

### 論文審査の結果の要旨

本論文では、何らかの習慣に対する過度ののめり込みとしての嗜癖概念について、習慣への没入という観点から、質問紙調査と臨床事例研究を通じて研究を行ったものである。第1章ではさまざまな用語を用いて語られているために混乱が生じている「嗜癖関連用語」について文献研究を行い、依存、乱用、中毒、嗜癖という用語の整理を行った上で嗜癖概念の定義を行っている。第2章では、嗜癖概念を理解するために「習慣への没入」という観点を導入し、これを測定するための質問紙の作成を行っている。ここでは3因子構造が得られ、これを用いて「習慣への没入」の様相を記述することができた。第3章では第2章で作成した質問紙の結果を用いて「習慣への没入」のタイプを分類し、5つのタイプを得た上で各類型と精神的健康度との関連を検討している。第4章では、第2章及び第3章の結果を踏まえ、「習慣に伴う罪悪感」の要素を追加して質問紙の改訂を行っている。この結果、5因子構造が得られた。第5章では第4章で作成した質問紙を用いて、新たに「習慣への没入」のタイプ分類を行い、6つのタイプを得ることができた。これらのタイプを精神的健康度と自覚的没入度の観点から検討することで、習慣への没入について各タイプの構造が得られた。第6章では、心理臨床事例を取りあげ、5章までで作成した「習慣への没入」概念を用いて検討を行うことで本事例に対する新たな観点からの理解を得ている。第7章では第1章の文献研究、第2～5章の調査研究、第6章の事例研究の結果を踏まえて総合考察を行っている。

以上のように本論文は、現在学術的に混乱しているといえる嗜癖関連問題に対して「習慣への没入」という概念を導入することで新たな観点からの理解を試みたものである。本研究で作成および改訂された「習慣への没入」尺度を用いることで、嗜癖関連問題についてより細分化された観点からの理解が得られ、将来への臨床的応用に向けての起点となる研究としてオリジナリティが高いものである。よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。

本論文について、口答による試験（公聴会）を開催した。調査委員から出された(a)嗜癖問題と現実からの回避傾向との関連、(b)得られた類型、特に「惰性型」の詳細、(c)心理臨床実践への接続性などについて質問がなされたが、いずれについても適切に回答されたので、最終試験に合格したものと認める。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。